

## 野田政権の原発情報“隠蔽”で遠のく東京五輪開催

2012.6.13 09:25 (1/3 ページ)



2020年夏季五輪の東京招致をアピールする石原慎太郎都知事（中央）ら＝5月24日、東京都新宿区

### 大飯再稼働と東京五輪誘致

東京電力福島第1原発事故は原因究明が終わっていない上、責任の所在も明確になっていない。その意味では、原発の「安全」は昨年の3月11日以前の状態と何ら変わらない。まして、安全に「暫定」はあり得ず、暫定である限り「命の保証」が確約されているとは言い難い。

かかる状況にもかかわらず、野田佳彦首相が8日、福井県の西川一誠知事の要請に応える形で、関西電力大飯原発3、4号機（同県おおい町）を「再稼働すべき」と表明した。

### 国民の命守らぬ政府

だが、大多数の国民が、首相の訴えに納得したとは思えない。それ以上に、世界の人々は「国民の命」を守ろうとしない日本のリーダーや日本政府に対して大きな不信を抱くことになったのではないだろうか。

世界の人々が日本の原子力行政を信じることができない間は、東京での五輪開催に賛意を表すことは百パーセントあり得ない。そうなると、各国のIOC委員が自国民の反対を押し切ってまで東京を支持することはないので、野田首相の大飯原発再稼働表明によって、東京五輪が実現する可能性は大きく低下したと考える。

2020年の五輪招致は東京、スペインのマドリード、トルコのイスタンブールの3都市が争うことになった。13年9月に予定されるIOC総会で、開催地が決定する。

スペインのマドリードは12年と16年開催の五輪に名乗りを上げたものの、2回連続で選考に漏れ、今回で3回連続の立候補。IOCの委員たちの評価は高いが、欧州の金融不安がマドリードの足を引っ張りそうだ。

ギリシャに端を発した欧州の債務危機は、不動産バブルがはじけて市中銀行の体力が消耗しているスペインを直撃する可能性が高まった。スペインが抱える直近の課題は銀行救済。欧州連合（EU）から金融支援を受ける見通しが立ったものの、先行きは楽観視できない。

幸いにして金融不安から脱したとしても、後遺症が出るのは必至。スペインの経済回復には相当長い期間がかかると予想されるため、マドリードでの五輪開催をスペインのみならず世界が疑問視する公算が大きい。

## **イスタンブール有利**

当面、最も有利と思われるのはイスタンブール。2000年と08年の招致では決定投票で敗れ、04年と12年の立候補では書類選考で落選。近年では5度目となる挑戦に加え、大義となる「イスラム圏最初の五輪」には説得力がある。

さらに、キナ臭い国際情勢がイスタンブールに味方している。国際的紛争の火種を抱えるシリアとイランに隣接しているトルコの地政学的位置が、有利になるのは間違いない。

イスタンブールは欧州とイスラム地域のつなぎ目に位置する。国際政治的な観点も踏まえ、宗教の対立を緩和する潜在的力を秘める重要な都市であることを考慮すると、この都市を決定投票から外す積極的な理由を見いだすのは難しい。

## **事故の情報公開を**

3都市の中で東京の存在は大きかった。国民の支持が低いというマイナス面以外は「治安の良さ」「きれいな街」「コンパクトな施設」「交通網の充実」などの分野で他の都市より抜きん出ているため、総合的安定度で高い評価を得られたはずだった。だが、残念ながら、それは原発事故がなかったならばの話だろう。

それにしても、野田政権はあまりにも内向きといえる。原発関連情報を隠したり、ごまかすことが多い。そして、隠蔽（いんべい）や誤った発表が明らかになると、住民がパニックに陥らないために行ったと言いつつ繰り返す悪習を払拭できないでいる。当然、海外からの疑問や指摘に積極的に応えているとも思えない。

五輪は、世界最大級のスポーツイベント。世界が納得する情報公開を日本がしないかぎり、東京での五輪開催は遠のくばかりだ。